

発見？！淀津 - 桂川右岸の調査から -

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 松永修平

1. 遺跡の位置と歴史的環境

(1) 遺跡の位置

- ・京都市伏見区淀水垂町地先（桂川右岸河川敷）

(2) 地理的環境

- ・桂川、宇治川、木津川の三川合流地上流部に立地。
- ・京都盆地の最低部に位置する後背湿地。三川合流に加え、巨椋池の影響もうける水害頻発地。

2. 歴史的環境（表1）

- ・延暦 23 年（804）、「淀」が文献資料に初めて登場。
- ・中世においても、関が置かれるなど交通の要衝としての役割を果たす。
- ・軍事上の要地としても注目→永正元年（1504）以降、城が築かれ度々拠点に。
- ・豊臣秀吉の伏見港整備や太閤堤の構築・宇治川の付け替えなどによって、淀は地形的にも大きく変化。

3. 調査成果

○1次調査（2021.10 ～ 2022.3）

- ・調査区を2つ設定。宮前橋の南側が1区（103 m²）、北側が2区（1,537.5 m²）。
- ・1区では2面、2区では 10 面の遺構面（生活面）を確認。弥生時代から明治時代までの遺構・遺物がほぼ断絶することなく、良好な状況で残されていることが判明。
- ・各時代の遺構・遺物は、地域間の流通・交通、また当地における社会変動を通史的に検討しうる重要な成果。

(1) 弥生時代（図6）

2区で弥生時代中期（約 2,200 年前）の土坑 2440（写真1）・2492、落込 2392（下層）などを検出。

(2) 古墳時代（図6）

2区で古墳時代初頭の竪穴建物6棟（写真2）、落込 2392（上層）、古墳時代後期の溝 2325 などを検出。

(3) 飛鳥時代～奈良時代（図7）

2区で掘立柱建物 2154（写真3）や、流路 2353 などを検出。掘立柱建物の柱穴から須恵器の壺が出土（写真4）。

(4) 平安時代（図8）

2区で平安時代前期の土坑 2326（写真5）や溝 2187、平安時代後期の井戸 2225（写真6）などを検出。土坑 2326 は、土器の出土状況などから墓の可能性がある。井戸 2225 からは平安時代後期の軒丸瓦や軒平瓦が出土（図 14）。

(5) 鎌倉時代（図8）

1区で流路 1017、2区で溝 2090 などを検出。

(6) 室町時代・安土桃山時代（図9）

1区で鉄精錬炉 1013 や炉壁・鉄滓が出土した土坑 1011・1014（写真7）、2区で堀 2123・2299・2350（写真8）を検出。堀 2123 からは、土器類などと共に瓦質の灯籠や風炉（図 13）、卒塔婆や柿経が出土。

(7) 江戸時代（図 10）

2区で井戸 2001（写真9）・2100、地業 2010・2011・2012（写真 10）などを検出。

(8) 明治時代（図 11）

1区で護岸 1001、2区で護岸 2125（写真 11）、地業 2135（写真 12）などを検出。

4. 「津」とは

(1) 「津」と「港」

『広辞苑』には、

○「津」

- ①船舶の碇泊する所。ふなつき。港。
- ②わたしば。渡船場。
- ③人の集まる所。

○「港」・「湊」（みなと）

- ①河海などの水の出入口。みと。瀬戸。
- ②湾や河口を利用し、防波堤を築いて、船が安全に碇泊できるようにした所。港湾。

○『延喜式』にみられる平安京への基幹港湾として記される津と湊（港）の違い

「津」…沿海岸の湾や入江、琵琶湖の岸、河川内に立地	⇔	「湊（港）」…河川の河口部に立地
勝野津（若狭）、敦賀津（越前）、加島津（能登）		比楽湊（加賀）、日（亘）理湊（越中）、
国津（佐渡）、方上津（備前）、難波津（摂津）		蒲原津湊（越後）など
塩津・大津（近江）、与等（淀）津（山城）、博多津（筑前）など		

(2) 「淀津」とは

- ・平安京および京都の外港

- ・西国から船で運ばれた物資を淀津で陸揚げ、または積替えし京へ運送

(3) 「津」遺跡の調査事例

- ・草戸千軒町遺跡（広島県福山市）

中世（13 世紀中頃以降）に発展した集落・港湾遺跡

地域経済の拠点集落で遠隔地とは直接結びつかず、輦などを経由し瀬戸内海の基幹航路（広域流通網）と結ばれる
芦田川の川底から中世の集落がそのまま姿をあらわす（「日本のポンペイ」という一般的イメージ）

- ・塩津遺跡（滋賀県長浜市）

平安時代～中世（14 世紀ごろ）まで機能した京都と敦賀をつなぐ重要港

琵琶湖に水没していたため、遺構・遺物の保存状態が良好

(4) 調査事例から考えられる「津」・「港」の構成要素

- ・船着き場、船入…護岸、橋・栈橋、水路など

- ・「港」を支える施設など…店・職人の仕事場、井戸、道路など

- ・「港」を管理する施設など…役所、寺社、蔵・倉庫、問・問丸など

(5) 今回の調査

- ・通常の集落ではほとんど出土しない瓦などの遺物や鉄精錬炉や大規模の井戸などの遺構を検出

5. まとめ

今回の調査によって、調査地が弥生時代から明治時代までの 2,000 年以上にわたり、人々の営みがほぼ途切れることなく続いていた場所であったことが明らかとなりました。

今回の調査で検出した平安時代の井戸や室町時代の堀・鉄精錬炉などは、一般的な集落跡でみられる遺構・遺物の様相とは大きく異なります。こうした遺構や遺物の検出・出土状況から当地は「淀津」の一面である可能性が非常に高いと考えられます。さらに、奈良時代以前にもこの場所に集落があったことが明らかとなりました。建物跡などからは他地方からの搬入土器なども出土しており（図 12）、遠隔地との交流があったことを窺うことができます。こうしたことから、この場所が「淀津」成立へとつながる交流拠点としての役割を果たしていたことがわかります。

参考文献

市村高男「中世日本の港町」『港町のトポグラフィ』シリーズ港町の世界史2 歴史学研究会編 青木書店 2006

岩本正二『草戸千軒』吉備考古ライブラリ⑥ 株式会社 吉備人出版 2000

小林大祐「近世淀城下町」『淀の歴史と文化』西川幸治編 淀観光協会 1994

鈴木康之『中世瀬戸内の港町・草戸千軒町遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」040 新泉社 2007

田良島哲「中世淀津と石清水神人」『史林』第 68 巻第4号 史学研究会 1985

松永修平・柏田有香・中谷正和『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

2021－16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023

水野章二編著『よみがえる港・塩津 北国と京をつないだ琵琶湖の重要港』サンライズ出版 2020

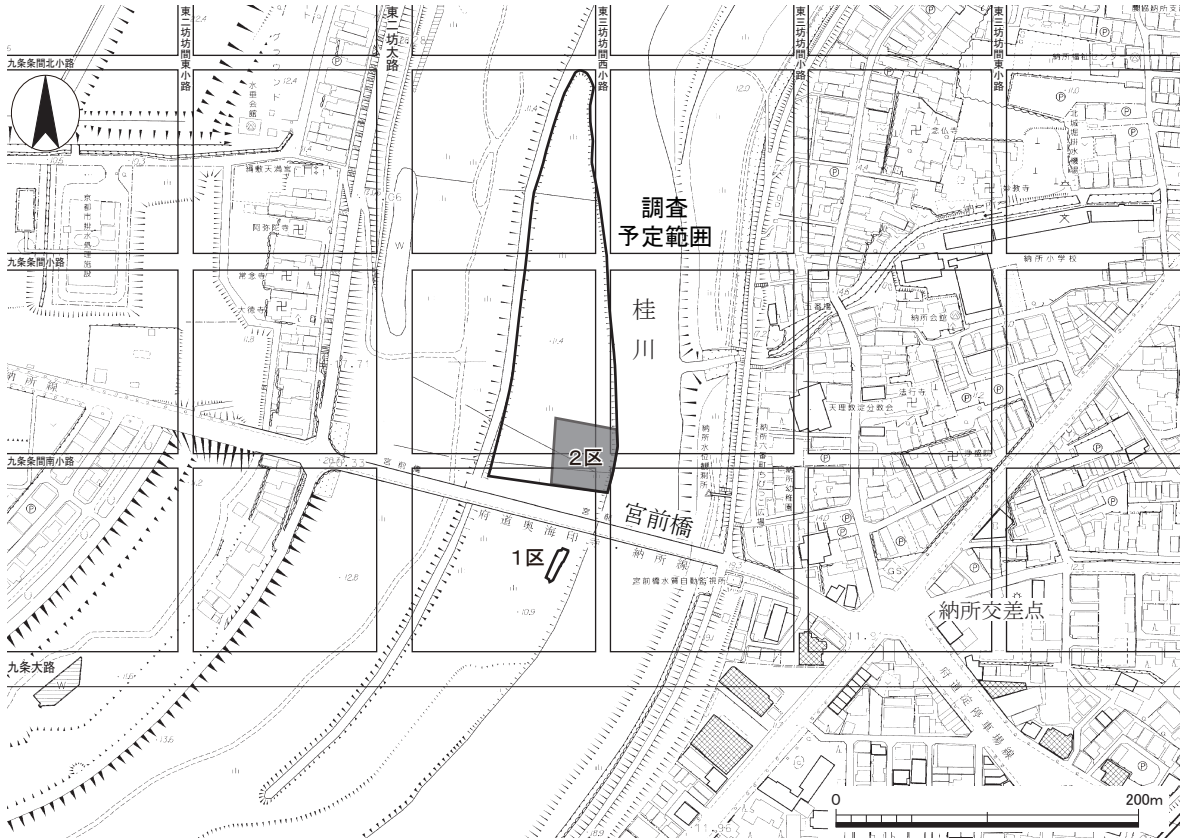


図1 淀水垂大下津町遺跡 調査地位位置図(1:5,000)

表1 淀周辺関連年表

延暦23年	804	桓武天皇が淀津へ行幸する。(『日本後紀』)
大同5年	810	薬子の変の際に、「与度市津」に兵が置かれる。(『日本紀略』)
貞観元年	859	「與度神」正六位上から従五位下に昇叙。(『日本三代実録』)
貞観16年	874	淀渡口廻りの人家、三十余軒洪水で流される。(『日本三代実録』)
寛弘6年	1009	この頃から「東西淀」という表現が使われはじめる。(『御堂関白記』)
仁安3年	1168	この頃「問男」と呼ばれる輸送業者が存在していた。(『兵範記』)
寛元年間	1243～1247	淀納所と中島が淀小橋で結ばれる。(『山城淀下津町記録』)
暦応4年	1341	この頃には下津に園城寺領の関が置かれている。(『園城寺文書』)
文明12年	1480	この頃には納所に「よと口の関」と呼ばれる関が置かれている。(『山科家礼記』)
永正元年	1504	薬師寺元一が主君細川政元に反し、淀の城に抛るが敗死。(『細川両家記』)
永禄2年	1559	細川氏綱が淀の城に入る。(『細川両家記』)
元亀3年	1572	細川藤孝が三好三人衆の一人岩成友通が立てこもる淀城を攻撃する。(『細川両家記』)
天正16年	1588	豊臣秀吉が淀に築城を命じる(淀古城)。翌天正17年に修築が完了する。(フロイス『日本史』)
文禄3年	1594	淀古城が破却される。豊臣秀吉が伏見城の築城(文禄元年)後、宇治川の付け替えを行う。
元和9年	1623	松平定綱が淀城の築城を開始する。(寛永3年(1626)完成) (『徳川実記』)
寛永14年	1637	永井尚政が木津川の河道付け替えを行い、城下町を拡張する。(『淀下津町記録』)
明治元年	1868	洪水後の災害復旧で京都府・淀藩合同で木津川の川違えが行われる。(～明治3年)
明治7年	1874	淀川の河川改修のため、淀城の石垣が解体される。
明治29年	1896	引堤事業により桂川の拡幅が始まる。
明治33年	1900	引堤事業により水垂・大下津町の集落が移転する。
明治35年	1902	與杼神社が現在の位置へ遷座を完了する。
平成18年	2006	桂川引堤事業により、水垂町・大下津町はさらに西側に移転する。

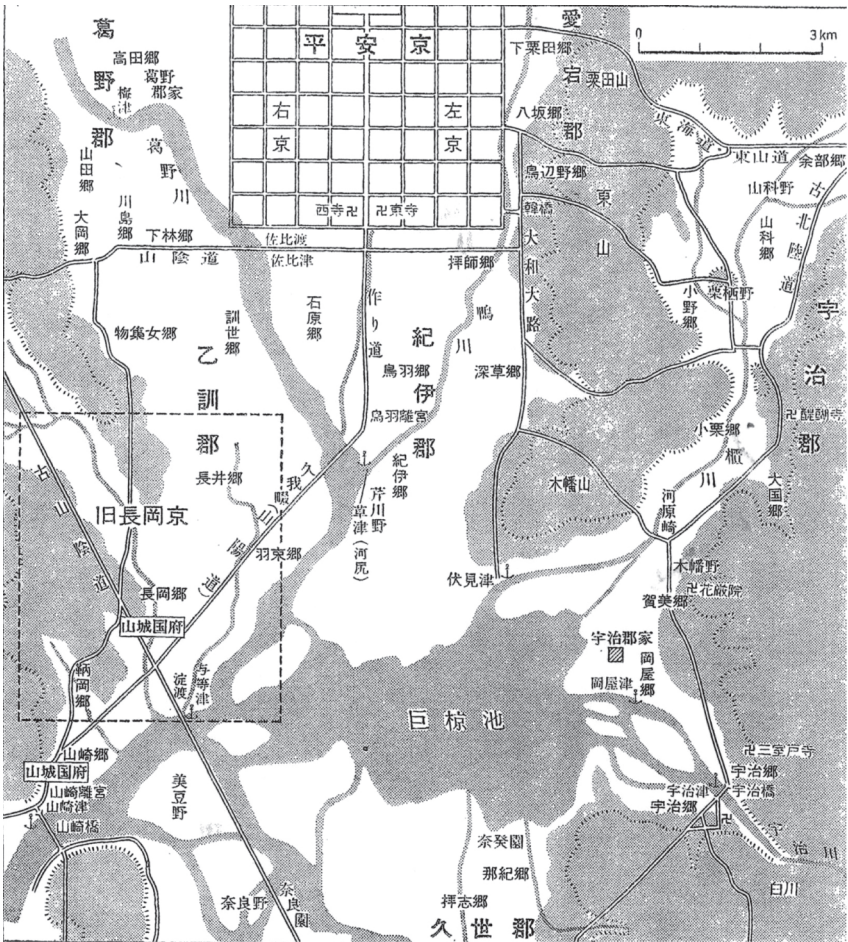


図2 律令時代における京南の地形と交通路の概要
(『史料 京都の歴史 第16巻 伏見区』平凡社 1991年 図2より)



図3 明治時代地籍図と調査地位置(1:5,000)
(明治30年に集落が移転する直前が記録された「桂川筋四郡買収地図」(淀川資料館蔵)をトレース)

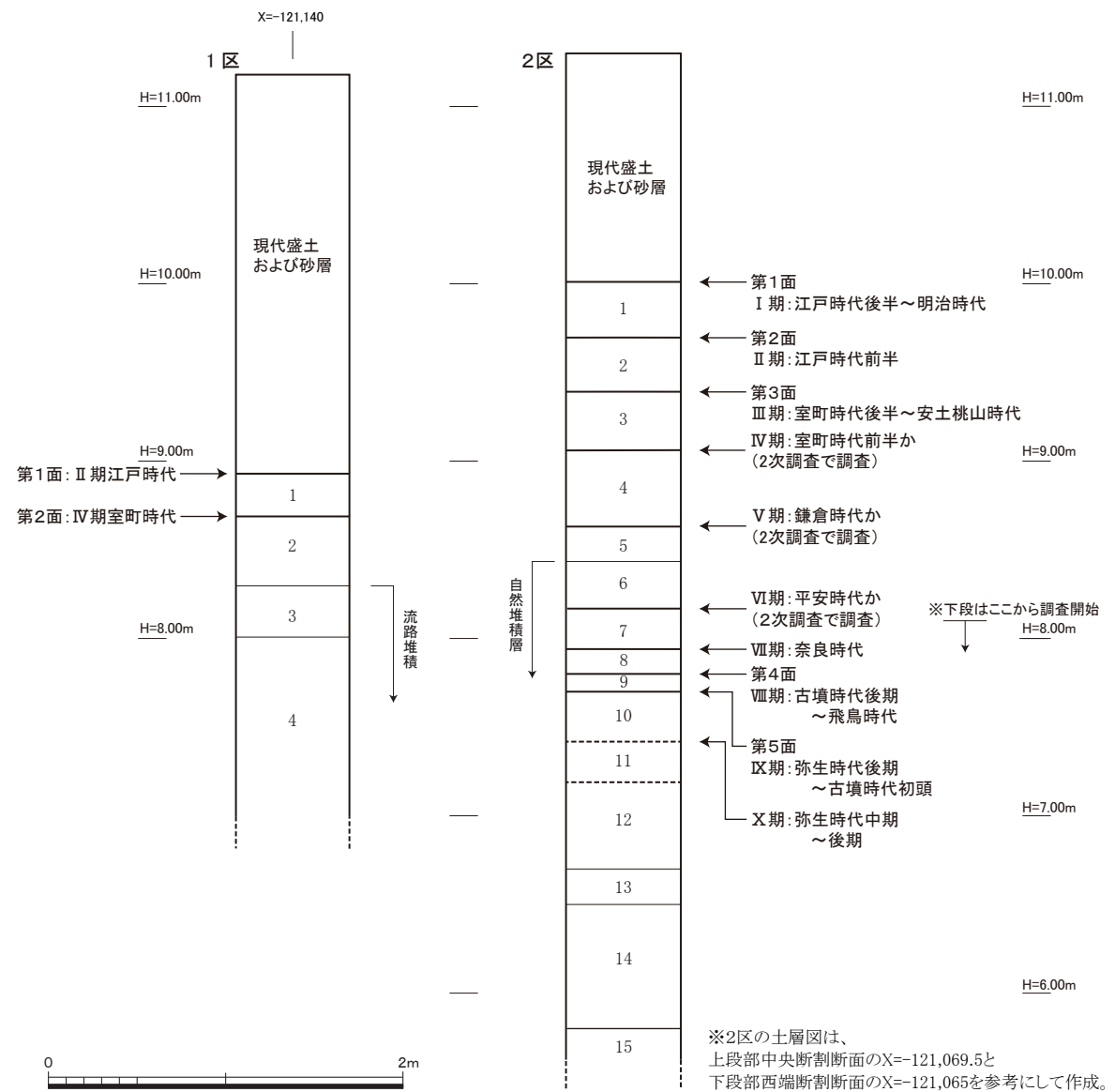


図4 土層模式柱状図(1:40)

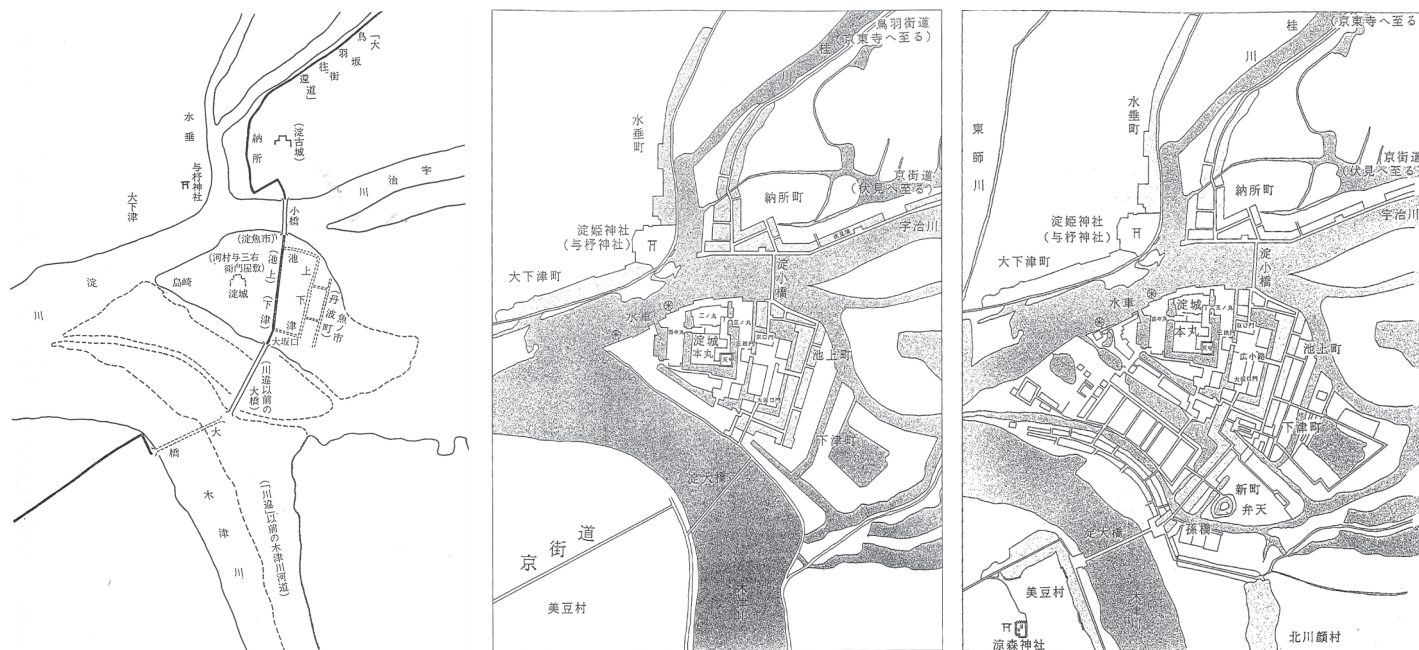


図5 江戸時代の淀(左から、元和9年以前、寛永14年の永井尚政による河川付け替え前、河川付け替え後)
(田良島哲「中世淀津と石清水神人」『史林』第68巻第4号 史学研究会 1985、西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994より)

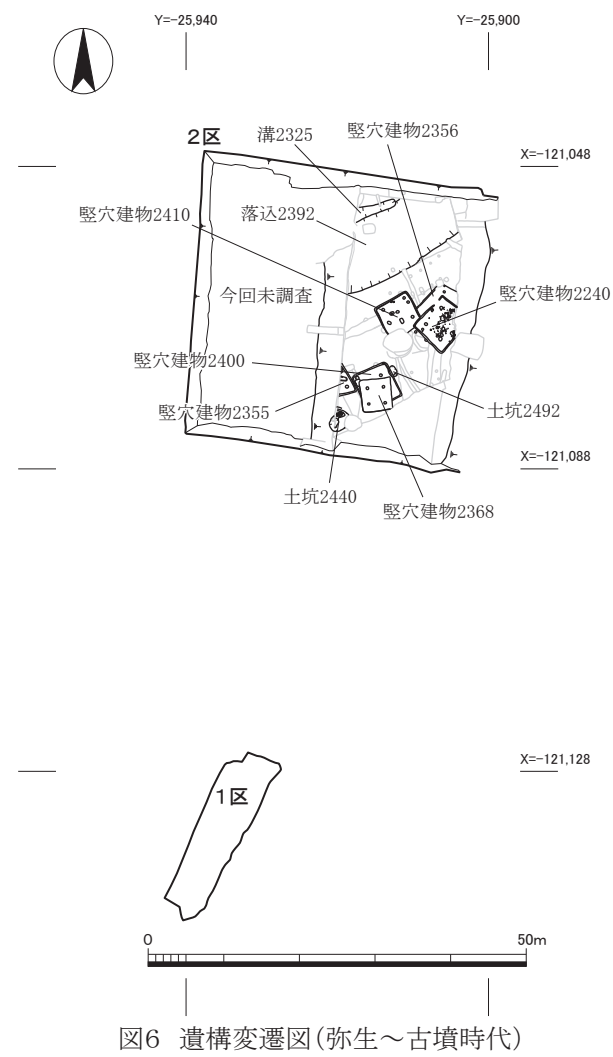


図6 遺構変遷図(弥生～古墳時代)



写真1 2区土坑2440弥生土器出土状況(南から)



写真2 2区竪穴建物2240土器出土状況(北西から)

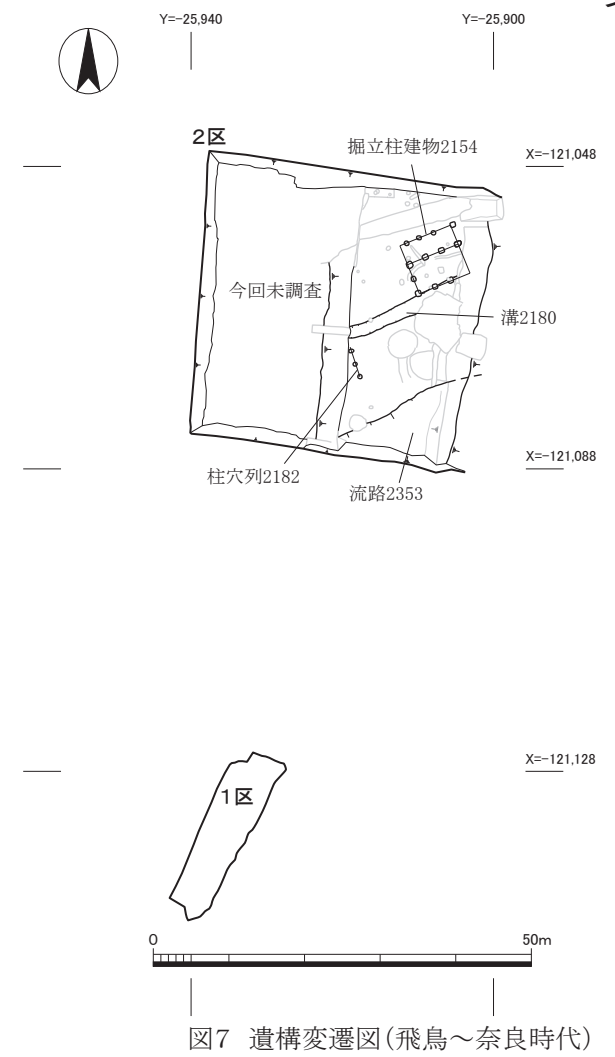


図7 遺構変遷図(飛鳥～奈良時代)



写真3 2区掘立柱建物検出状況(南西から)



写真4 掘立柱建物柱穴からの土器出土状況
(南西から)

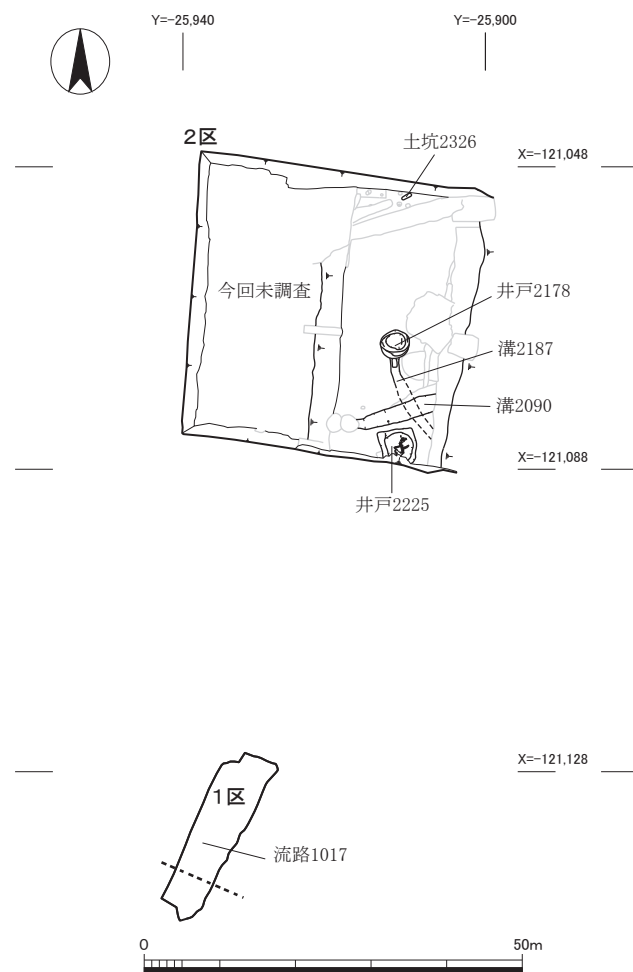


図8 遺構変遷図(平安～鎌倉時代)

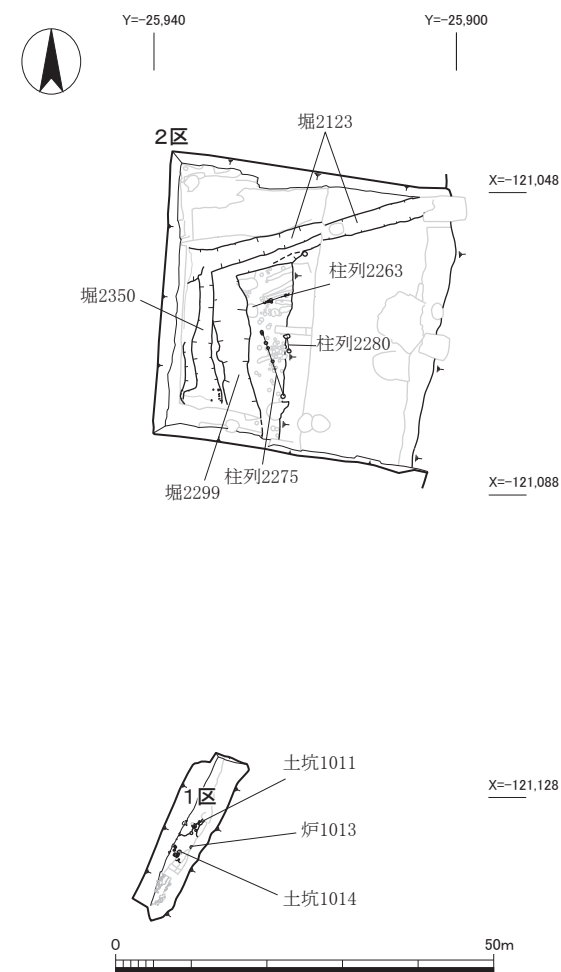


図9 遺構変遷図(室町～安土桃山時代)

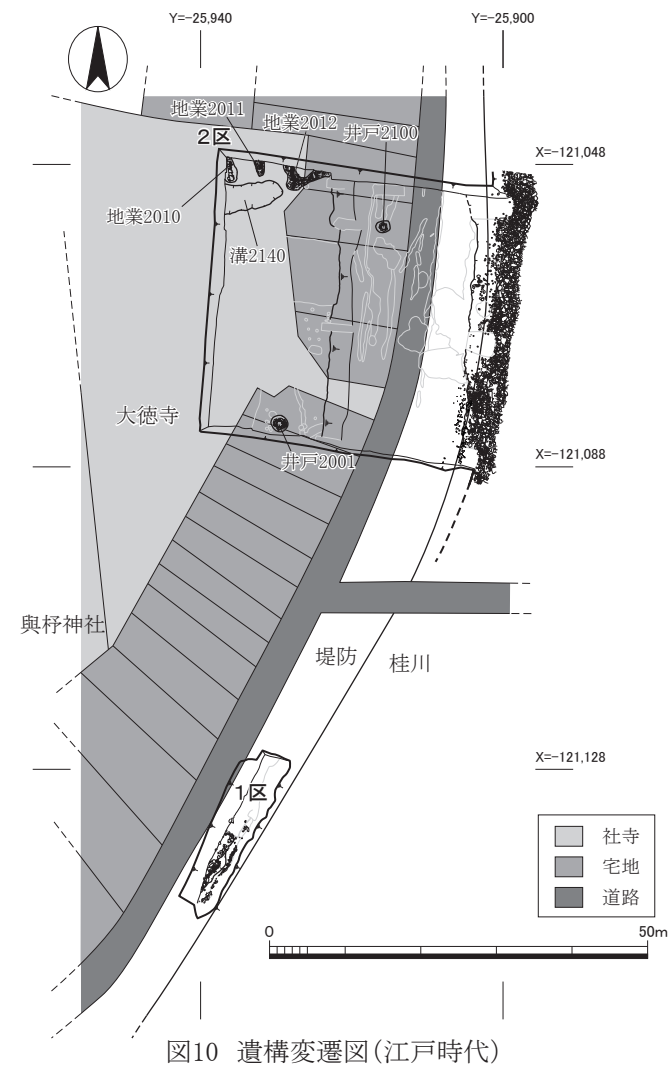


図10 遺構変遷図(江戸時代)

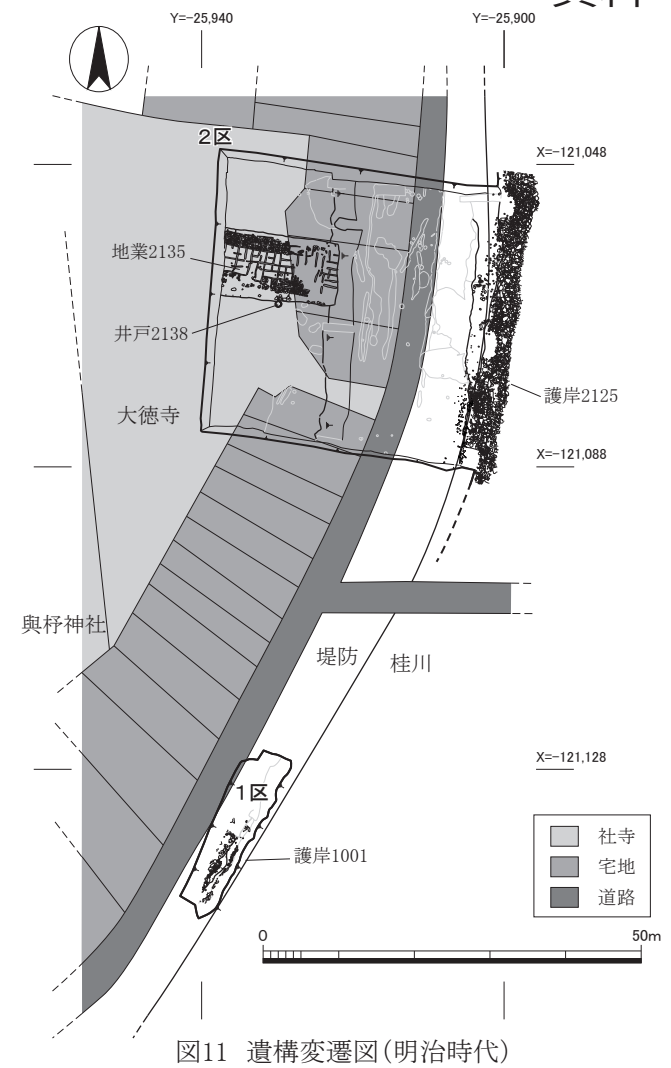


図11 遺構変遷図(明治時代)



写真5 2区土坑2326検出状況(西から)



写真7 1区土坑1014炉壁・鉄滓検出状況(北から)



写真9 2区井戸2001検出状況(北から)



写真11 2区護岸2125検出状況(東から)



写真6 2区井戸2225検出状況(東から)



写真8 2区堀2123・2299・2350検出状況(北東から)



写真10 2区地業2012検出状況(南西から)



写真12 2区地業2135検出状況(西から)

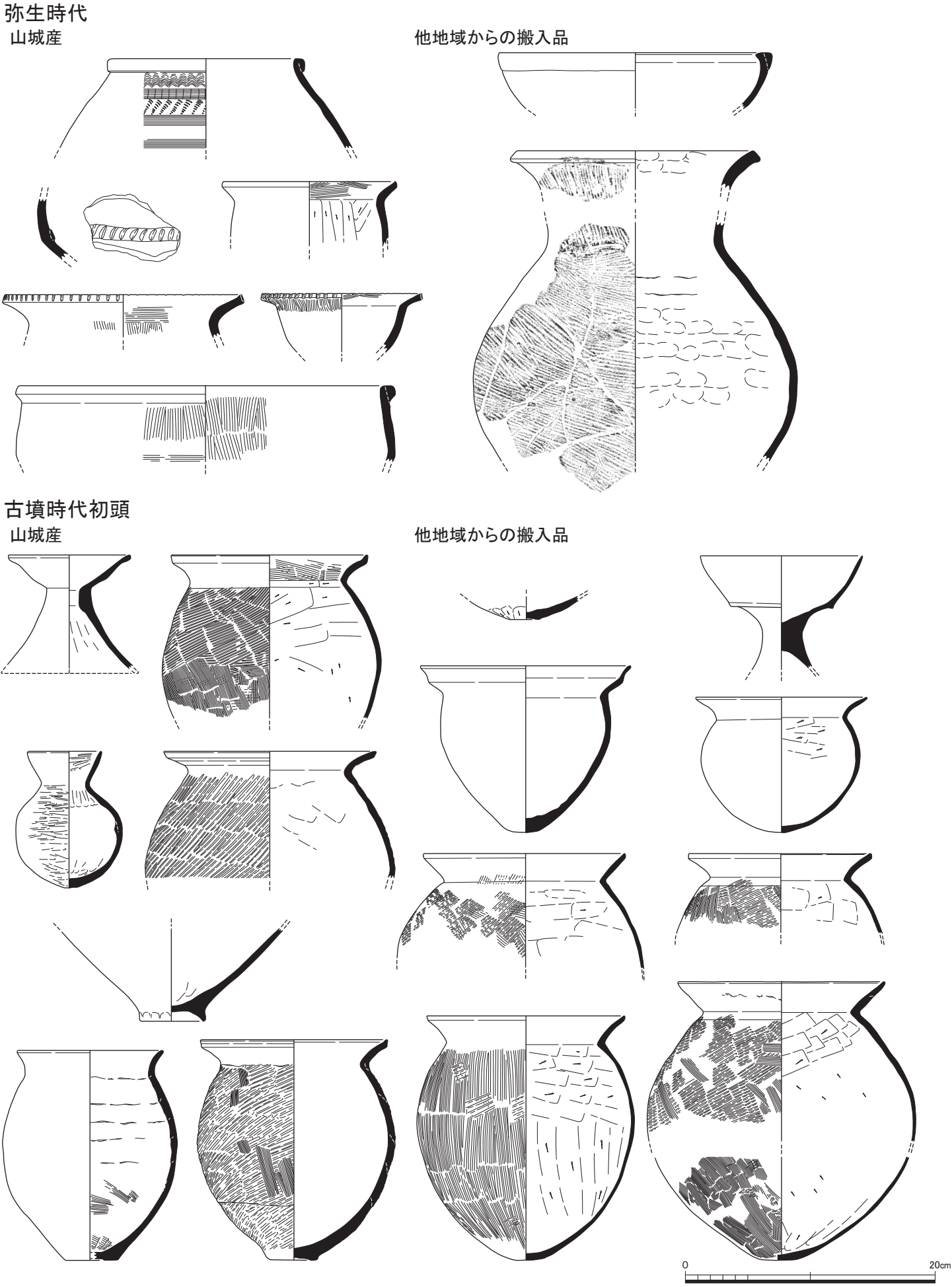


図12 弥生時代・古墳時代初頭の遠隔地交流があったことを示す出土土器 (S=1:4)

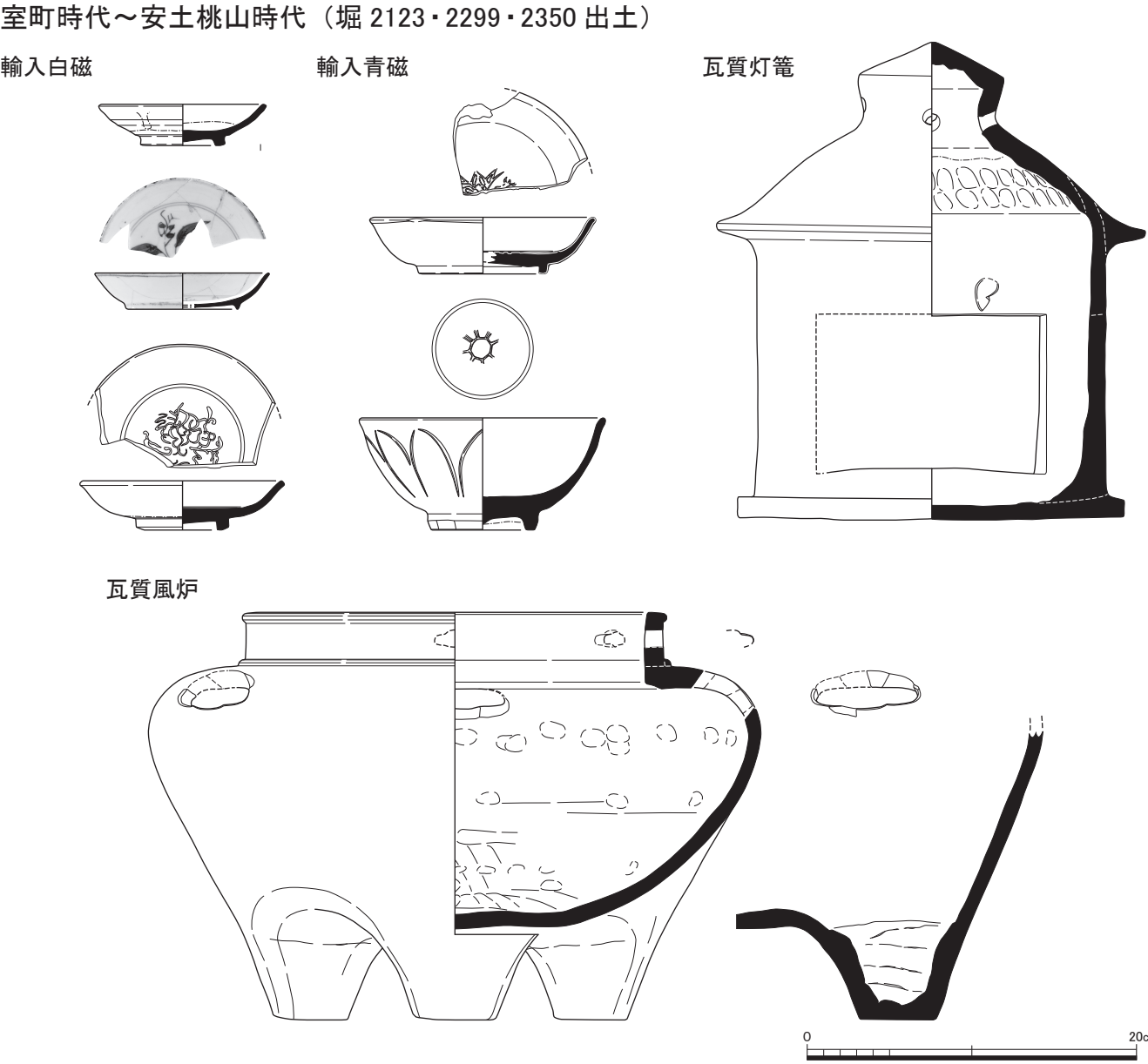


図13 堀2123・2299・2350出土土器類 (S=1:4)

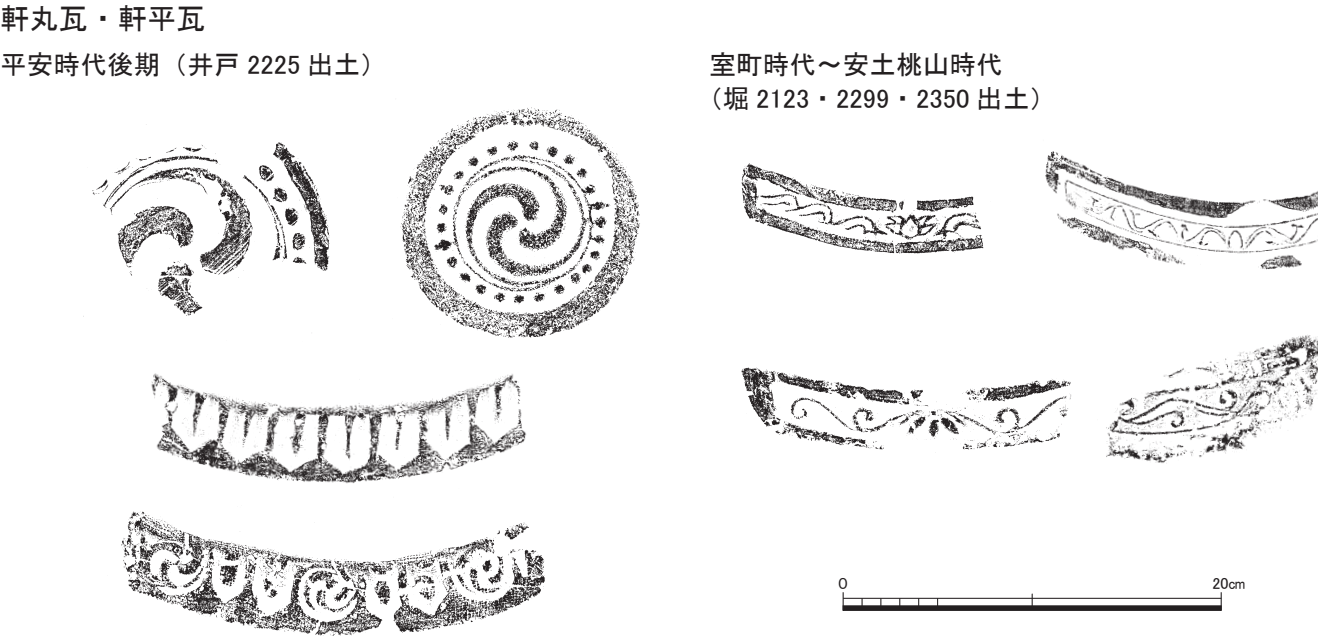


図14 出土軒丸瓦・軒平瓦 (S=1:4)